

結・たより, Vol.2

発行:神戸 : ウイメンズ・シンクタンク・ユイ

1995.7.31. - 12p

請求記号:震災-6-z26

第2回ユイ・フォーラム

6月24日、神戸市中央区の兵庫県立のじぎく会館で、「ボランティア活動をまちに根づかせる」をテーマに第2回ユイ・フォーラムを開きました。

大震災直後から、被災者支援のために日本はもとより世界中からボランティアが駆けつけてくれました。その多様な活動は“ボランティア元年”という言葉まで生みだしました。ありがたかったボランティア、逆に迷惑だったボランティアなど色々、考えさせられることもありました。

そして、多くのボランティアが引き上げた今、地域社会の中でどのように助け合いの精神を根づかせていくか、. . . これからの課題です。今回は震災の中でボランティア活動の最前線を担ってこられた中村順子さん（東灘・助け合いネットワーク）と森綾子さん（宝塚市社協ボランティア活動センター）のお二人に震災当時から現在に至る活動経過や課題を報告していただき、その後下記のテーマに分れてワークショップを開きました。

「ボランティア活動を社会がどう支えるか」, 「いいボランティア・悪いボランティア」, 「ボランティアコーディネーターの役割とは」

参加者は20人とやや少なめでしたが男子学生たちの参加もあり、またゲストのお二人の話は大変具体的で、その問題提起を受けて後半のワークショップでも充実した議論ができました。

中村さん講演要旨

プロフィール

神戸ライフ・ケア協会理事。震災後「東灘・地域助け合いネットワーク」を結成。水汲みや安否確認のほか、仮設住宅でのコミュニティー作りにも取り組んでいる。

◇◇

震災後、過労で2日半休んだほかは、ずっとボランティアの現場にいます。もう夏ですが、あの日以来、季節感のない毎日です。我が家は地震による被害が少なかったものの、親戚宅が4軒全壊し、一カ月間は17人が同居していました。外でも中でもトラブル続きで、一時期は本当にしんどかった。まあ、家事からは解放されたので、その分、外の活動に専念できた訳ですが...

地域の中で、在宅のお年寄りや障害者を支える活動を始めて13年になります。「神戸ライフ・ケア協会」は、時間600円の会員制有償ボランティア。1時間働いたら12分間が「時間貯蓄」として積み立て

られ、将来、自分や家族が必要となった時に利用できるシステムをとっています。年間400人のお年寄りをケアしていましたが、震災で会員が激減しました。東灘区内にいたっては、130人近い利用者がいたのに、転宅、入院、施投入所などで、地域に残っているのはわずか25人。痴呆性老人のデイ・サービス拠点が全壊するなど大きな痛手を受け、また多くが50-60歳代の主婦だったこともあって、被災後すぐに、協会として救援活動ができる状態ではありませんでした。

その一方で、ライフラインが断絶した中、壊れかけた自宅で困り果てている人がたくさんいました。全国から来てくれていたボランティアの受け皿も至急に必要だったので、2月2日、ライフ・ケア協会とは別に、無償のボランティア「東灘・地域助け合いネットワーク」を立ち上げました。



ネットワークの活動を振り返ってみると、2月中は水汲みや洗濯、荒ごみ出しなど生活関連のお手伝いが多く、水汲みだけで602件、10トントラック25台分の水を調達し、重いポリタンクが持てない人のためにペットボトルに移し変える作業をしました。3月は安否確認が199件、話相手や様子伺いが841件。東灘区内は民生委員の8割が被災したので、業務ができるようになるまでの期間をボランティアが肩代わりした格好です。

仮設住宅については、2月末から区内でも第1次入居が始まり、何に困っているかヒヤリングを行いました。すると、驚いたことに「私は今どこにいますか？」と尋ねる人が多かったんです。よその土地から突然来て、右も左も分からないんですね。周辺施設や開いている店の情報をマップにして手渡すと、大変喜ばれました。住宅周囲の水たまりや内部の段差についても、行政は対応が遅いので、ボランティアが応急措置をしました。例えば、外から丸見えなので目隠しのシールを張ったり、水たまりに砂利をまいたり。金沢の大工ボランティアが踏み台を50個作ってくれたので、欲しい人を募ったところ、800人から応募がきて、慌ててスポンサーを見つけて追加したりもしました。

びっしり並んだ仮設住宅には、ゆとりのスペースがなく、近所に知り合いもいないため、なかなか心が癒されません。そこで4月以降、仮設住宅にテントを持ち込んで「茶話やかテント」と名付けた移動集会所を開いてきました。入居者同士仲良くなってもらうのが目的で、月2回、人形劇や法律相談などのイベントも交えながらお茶会をします。テントでのコミュニケーションが、自治会結成につながっていけば、と願っています。また買い物や通院に不便している人も多いので、近々、カーボランティアを募って、移送サービスを始める予定です。巡回バスのような定期便と、ドア・ツー・ドアの2本立てを考えています。

今、ボランティアを受けたいというニーズは個別・具体的なものになり、数から質への転換が求めら

れています。ネットワークでは、2週間前から、ボランティア希望者にまず、被災者との接し方や車いすの押し方など6時間の入門講座を受けてもらっています。ベテランボランティアとのディスカッションも交え、自分で課題を見つけていく人材になって欲しいと願っています。

震災で140万人のボランティアが神戸入りし、今まで「特殊な人たちがやるもの」と思われてきたボランティア活動がようやく市民権を得ました。これを一過性のものにせず、地域に根づかせるために何が必要かを、真剣に考えなければなりません。現場を抱えていると、このような大きな課題を整理して考える時間と余裕がないのが悩みですが、幾つか気づいた点をお話します。

まず、ボランティア自体が、自立した実践力のある団体にならないといけません。今も被災地では30から40のグループが積極的に動いていますが、地元の人は少なく、外部からの優秀なスタッフによって支えられています。なぜ地元が少ないかというと、今まで神戸のボランティアグループは行政のお手伝いばかりで、責任のあることはやらせてもらえなかったり、ボランティア側も期待される実践を伴わなかった傾向があります。今回、草の根グループは、行政が動き出す前から独自に活動を始め、大事な役割を担いましたが、行政に「おんぶにだっこ」だったグループは立ち上がりが遅れました。企画段階から責任を持ちながら活動してきた草の根グループは、すべて自力でやってきたので足腰が強く、リーダーシップも発揮できます。本当のリーダーを育てるためには、行政がボランティアを手足としてだけ使ってはだめなんです。

ところが、そんな自主性を持とうとするグループに対して、社会的に支える基盤がないんですね。ライフ・ケア協会も法人格がないため、拠点を借りるのも一苦労でした。税制の優遇措置もなく、大口の寄付はすべて社会福祉協議会の方に流れてしまいます。現在NPO法案の立法化が進ん進んでいるようですが、活動しやすい条件作りを強く求めます。

また活動の質といった面では、ボランティア教育が欠かせません。若者の間では「神戸でボランティアをする」のがトレンドになっているようで、遠方から「夏休みに神戸に行きたいので宿と仕事の手配を」という電話がよくかかってきます。本音を言えば、現在の少し落ち着いた状況の中では、神戸に来なくても、あの経験を生かしながら地元で活動し、交通費の半分でも送って欲しいんです。幾らボランティア希望者がいても、うまく地域にマッチングできなければ意味がありません。コーディネーターの役割がもっと見直されるべきだと思います。

森さん講演要旨

プロフィール

宝塚市社協ボランティア活動センターチーフコーディネーター。主婦から、点訳ボランティア10年の経験を経て1987年からボランティア活動センターのコーディネーターに就任



◇◇

1987年、全県下（神戸市を除く）の社会福祉協議会（＝社協）のボランティア活動センターにコーディネーターを配置することが決まり、宝塚市ではボランティア出身の私が就任しました。それまで社協職員が、さまざまな委託事業の合間にコーディネーター的な仕事もしていたのですが、私は専任職として8年間、ボランティアの募集とニーズの発掘、そして両者をつなぎ合わせる作業だけをコツコツやってきました。当初、年間の依頼件数が68件だったのが、昨年は3157件に増加。行政や自治会、民生委員との連携も取れ、地域の中での信頼も得て、ここ2、3年はセンターに座っているだけで市内のボランティア情報はすべて入ってくる状態になっていました。

震災時、ボランティアセンターが社協から離れて、行政と両輪で動いたのが、宝塚市の特徴です。社協のある総合福祉センターには情報が入ってこないため、1月21日、徒歩10分の距離にある市役所まで身ひとつで出掛けていって、災害対策本部の横にボランティア受付の机を出しました。そのまま「ボランティア本部」として災害対策体制の中に組み込まれ、専用線を引き、資材ももらいました。とても電話で登録してコーディネートできる状態ではなかったのが、ボランティア希望者には直接、市役所まで来てもらい、一月中は役所内に泊まりこんで働いてもらいました。全国から約1万5千人が集まり、多い時で一日600人が動いてくれましたが、市内でのボランティア活動は、既存のNGOも含めて、すべて本部と連携が取れていました。

具体的な活動としては、引っ越しやカーボランティア（1700件）、炊き出し（1800）、高齢者の安否確認（4724）、家屋診断（337）、洗濯（250）など。避難所に対しては「メール便」と称し車やバイク、自転車で一斉に生活情報を伝えにいき、そこでニーズを吸い上げてきて、保育ボランティアや視力障害者協会によるマッサージのサービスを派遣したりしました。

市役所内にいると、物資がいつごろ入ってくるかなど情報が得やすく、市の各部局と連携を取りながら動けたのが良かったと思います。実績が認められ、その後に作られた市の地域防災計画の中で、災害時にはボランティア本部を設置することが正式に盛り込まれました。ただし今回、コーディネーターが私一人で大変だったので、最低でもあと4人は欲しいですね。

ボランティア本部は2月末で解散しました。「早すぎる」「もっと働きたい」という声もあったのですが、宝塚は神戸などと比べると被害が少なく、電車も動いていたので、ここから先は自立できると判断しました。緊急時を脱したら災害ボランティア活動はパッと切って、後は元のボランティア活動センターの中で個別・具体的なニーズに応じていくつもりです。

災害を機に、新しいボランティア像が見えてきたと思います。以前は「金持ちや暇のある人が、かわいそうな人への慈善を行う」というイメージがありましたが、本当は困っている人のために、だれもが、自分にできることをするのがボランティア。相手に善意を押し付けるのではなく、社会のため、自分のためなんです。福祉分野だけに限らず、環境保護や国際協力、まちづくりなど、もっと広い視野で捕らえたいですね。現在、ボランティア活動センターは社協の中にありますが、幅広く活動しようと思えば、社協から切り離して、独自に総合的な拠点を設けるべきだと、私は思います。

災害時に問われたのはふだんの姿勢でした。宝塚の場合、ふだんから高齢者や障害者の「足」としてカーボランティアを実施したので、震災直後もスムーズに機能させることができました。ボランティアにおける人間関係もそうで、ボランティアをする側と受ける側は、本来「対等」な関係なのですが、ついお節介を焼いたり、見下したような物言いになりがち。ふだんから、夫婦間や友人との間で対等な関係を結んでいるかどうかのカギです。

今後のボランティアの在り方として、楽しく、無理なく続けるというスタンスが求められています。よく学生さんで授業を休んででも...という人がいますが、やはり本業を大事にして欲しいですね。ボランティアする人が増えれば、ニーズは十分まかなえるのですから。ありのままの自分を出しながら、常に相手と対等な関係でいるかを自問しつつ、自分の街でできる課題を見つけていく。震災を機に、そんな新しいボランティア観が芽生え、根付いていけばと願っています。

第2回ユイ・フォーラム ワークショップ報告

ボランティア活動を社会がどう支えるか

問題提起：人材難、資金難で自分のお金を持ち出して活動しており、日常的活動として根づかない。

A：子育て後の主婦が介護の講習会等に多数、参加しているがこの人たちは精神的にも経済的にも安定していて、ボランティア予備軍である。活動に入るためには、ボランティアについて情報の提供が必要である。また、ボランティアコーディネーターが配置されている必要がある。

問題提起：介護をボランティアでまかなおうとするのは日本型福祉の弱点である

B：震災当時、メリケンパークでボランティアをしたが、窓口が不明で義援金の受付等こまった。日頃のボランティア意識が薄いこともあって、突発的な事態に対しては適切な行動がとれなかった。問題提起や不満をぶつけるだけで身内のサークル的な行動が目立ち、力を生かしきれていない。

ボランティアの存在そのものが明確でなく、社会にアピールできていないので、自分の活動として感じられない。ボランティア同士の交流も必要。意見交換もなく、活動が閉鎖的で地域に根づいていない。ボランティアの数を増やし、地域に根づかせるための制度の検討や交流が必要である。

C：ボランティアの活動が見えるようにする。数を増やすためには企業からの寄付などで活動資金を潤沢にする。活動拠点の整備も必要であるが、家賃が高く個々のボランティア団体では無理なので、法人化を進め税制面でも優遇措置が受けられるようにする。

- D : 既存の公共施設を開放するなど、資金や人材で行政との連携が必要である。
- E : ボランティア同士が対抗意識を持っていたはいけない。
- F : 地域の実情にあった、ボランティアのためのセミナーを常時開講し、ボランティア教育をする。
- G : 震災時の義援金が直接ボランティア団体に届くようにしていたら、もっと有効に被災者に届けられた。善意を活かすルート作りも必要である。
- H : ボランティア団体の活動資金の面での援助も必要である。
- I : 幼少時からボランティア体験させて、社会との関わりの原点として認識させるような学校教育のあり方を考える。
- J : 個を尊重した自発的行為としてのボランティアを若い人に教える。
- K : ボランティアが無償であるのは疑問である。資本主義社会にあっては経済的保証のない行為は社会に根づかない。
- L : すべてが協調できる社会にするためにボランティア活動がある。活動資金は必要であるが、自分のできる範囲で責任ある行動をとることがボランティアである。
- M : 自発的で自由といわれる裏には危険性も含んでいる。
- N : ボランティアに対する認識がまちまちなので、ボランティアの概念を社会的に統一したものにする必要がある。

(参加者の意見より 山本 麗子記)

ボランティア・コーディネーターの役割

実際にボランティア活動センターのコーディネーターの仕事をしている森綾子さんにコメンテーターになってもらい、ボランティア活動の中でのコーディネーターの役割について話し合った。

◆話し合いのまとめ

(1) コーディネーターの仕事

- * ニーズを収集する
- * ニーズとボランティアを結ぶ
- * 関係各機関の情報を日常的に収集する
- * 連携していく組織とネットワークを作っていく
- * ボランティア活動の啓発
- * ボランティアの研修・教育

(2) コーディネーターの資質

- * 自分が目立たず、人のもっている力を上手に引き出せる
- * 相手を褒め、きちんと評価できる
- * ボランティアをする人の立場にたてる

- * 自立していて、バランス感覚がある
- * 社会性、組織的に仕事ができる

(3) コーディネーターを支える資源

- * ふだんのネットワーク、人間関係及び他分野の機関と
- * きちんと収集・整理された情報
- * 研修制度
- * ボランティアグループのネットワーキング
- * 行政の支援～お金と場所

森さんのコメント

コーディネーターとして仕事ができるようになるまでには5年はかかる。3年で異動していく行政職員や社協職員には向かない。

ボランティア経験者でリーダー的役割を果たしている人、主婦や熟年男性の中から登用し、専門職として育てていくのがいいと思う。

(まとめ 尼川 洋子)

よいボランティア、悪いボランティア

◆悪いボランティアって？

「自己満足、おせっかい、肩書求め、遊び半分、善意の押しつけ——つまり目的喪失の人」

「この地震でも、周りの状況がきちんと把握できない、自分中心で手のかかるボランティアがたくさんいた」

◆よいボランティアって？

「自身の生活の自立ができていて、心に余裕があって、そしてバランス感覚に優れている人かな」

自主的に、人から強要されず、「個」の自分から社会性の「公」へと発展させていくボランティアの根源は何なのでしょう。それは人に対しての、そして自分に対しての「思いやりの深さ（人間性）」にあるように思います。

では深い思いやりのある、成熟したボランティア組織にするためにはどうすればいいのでしょうか。まず第一にリーダーの資質ですが、豊富な人間関係の経験があり、バランスのとれた人であること。

第二にグループはできるだけ多分野からの集まりにしたい。多様な生き方や、考え方が交錯すれば、偏った意識にとらわれず自由で広がりのある行動（お互いが良い影響を与え合える作用）ができると思う。いろいろな層の人が集まった、風通しのいいボランティア組織であることがボランティア活動の活性化につながる。

(岩田 洋子記)

その時、六甲アイランドは

◆「アンビリバーブル」なできごと

つい先だったの日曜日の早朝、まだ眠りから醒めきっていない頭にビーンと響く大きな振動音が聞こえてきた。一体何ごとと窓をあけると、どうも島の中で騒音が発生しているようだ。訳がわからないままほとんど午前中を怪音に悩まされて過ぎてしまった。

音の発生源を探しに出かけて行った夫（この時期に運悪く自治会長をやっていたもので）が、それが岸壁修理のための工事音だということを突き止めて帰ってきた。結論を言えば、3年かかる工事を2年でやるようにとの某行政当局の指示で突貫工事に入っただけらしい。それにしても住民3000戸、仮設住宅2000戸の人たちが住む街の一角で大きな騒音を発する工事が住民の了解は勿論、説明もなく行われるという不思議には、驚くばかりである。説明を求めた自治会に対しては、業者を含めて申し訳ないの一点張りだったそうだが、「震災の復興」という大儀名分の前にうっかりすると住民の「健康で文化的な生活」などぶっとなでしまいかねない出来事であった。今回の大震災で住民不在、行政主導の市政が強く問われてきたはずではなかったのか。全く「アンビリバーブル」な出来事であった。

◆住民主体の自治組織が危機を乗り越えた

一方、震災直後から六甲アイランドの自治組織（自治会、住宅管理組合、商業施設の自治組織、住民のボランティア全てを意味する）は見事な連携プレーで困難な時期（今もそうなのだが）を乗り越えてきたように思う。

地震が起きたのが火曜日の早朝であった為に、交通機関の途絶が大半の人たちを週末あたりまで島内に足止めにしてしまった。そのお蔭で？ 災害対策委員会（後に復興委員会と改名、六甲アイランド全体の自治組織で、主に交通アクセスの問題等を担当）、復旧委員会（管理組合主体の建物の復旧を担当）の組織が早い時期に編成されて、震災時の住民の不安鎮静に大きな役割を果たしたと思う。災害対策委員会は、地震当日の9時には立ち上がっていた。もっともそれには、住宅の被害が少なかったからできたということでもあろう。

夫とは言えば、物がこわれて散乱した家の中の片づけなどそっちのけで、この日から約2ヶ月くらい連日災害対策本部にご出勤という仕儀になり、今でも何やかやとわが家の主夫業をサボる口実になっている。このす早い立ち上がりのお蔭で必要以上の不安やデマの流布が防げたし、水や食料などの配布、それらの物資を配るためのボランティアの募集なども各戸に備えられた有線放送を通じてスムーズに行われた。その上、最初の1週間くらいの間に生協、島内企業、ディベロッパーなどからさまざまな物資の供給があり、水や食料が途切れることなく供給されたという幸運もあった。これらの物資の運び込みや分配には主婦を中心とした多くの住民が自発的にその任を担いあい、物資分配をめぐるトラブルは皆無であった。

◆全てのことは普段のくらしの延長線上に

ここで危機に際して、何が有効かということを考えるのだが、危機的な状況の全ては普段の生活の延長線上に生じ、解決もまたその中でしかあり得ないということに気づくのである。行政も普段の行政の対応力を大きく超えることは出来ないし、自治組織もしかり、個人の対応力もしかりということであ

る。普段、おろそかにしていたものは、当然危機的状況の時にも力を持たないし、作ってこなかった人間関係は危機的状況の中でも生かせないのである。震災に強い街づくりということが言われているが、どうもハード面だけが強調される感が強い。ベースとして耐震、耐火の街づくりは必要だが、そこに人間関係づくりというソフトを装備しない限り、生きた街にはならないだろう。行政、地域、個人がそれぞれの場面で実効性のある人間関係づくりを考える必要を痛感した阪神・淡路大震災であった。

阪神大震災と女性問題

朴木 佳緒留

(神戸大学発達科学部助教授)

この度の大震災の陰に女性問題があることに、人々が気づきはじめてきた。当初の生命と生活がおびやかされるような異常事態が続いていた時には、男性のもつ筋肉の力が必要であったし、我が身をかえりみず奮闘した男性たちに感謝した人々も多いと思う。しかし、我が身をかえりみず奮闘したのは女性も同じであったはずだ。多くの女性は「生活」を維持するために奮闘したが、それに対する評価は目立たず、さらにそのことが「企業社会」の論理と抵触し、女性は震災の陰で「ワリを食う」結果になったように思われる。

震災から2週間すぎた頃より、男性の多くは企業に取り込まれてしまった。交通事情の悪さから、早朝に出勤し、帰宅時間は遅く、その間の生活は女性によって支えられ、そのいずれもが体力、気力を要することがらであった。そのため、出勤できない女性がでたり、事業所の側から、「どうせ女性は出勤できないだろう」と「あきらめられてしまっていた」場合もあった。また生活維持の活動ができない立場にあった女性は何カ月もの間、子どもを疎開させたりしながら、「家庭と職場の両立」に苦しんだ。結果として、「イザという時はやはり男性が頼りになる」という風潮が生まれはしなかっただろうか。

震災後、真っ先に首を切られたのはパートで働く女性たちであった。男女とも失業した人は多く、「一家の大黒柱」の職業保障はもちろん大切であるが、だからといって、パートは解雇されても仕方がないわけではない。そして、パートで働く母が生計を支える母子家庭は「しわよせ」を引き受けさせられた。また、震災を理由として遠隔地転勤を命じられ、「自己都合による退職」をせざるを得なかった女性もいる。

このような解雇問題は女性だけに現れたことがらではないが、女性問題の様相を帯びていないとは思われない。また冒頭に記したように、企業に取り込まれた男性を支える女性たちというかたちで、性別役割分業は通常時以上に貫徹されたのではないかとも思う。これらのことを明らかにするための調査が是非に必要である。

現在、数名でその準備にかかっていますが、人手不足です。調査者、被調査者としてご協力くださる方を求めています。情報提供も含めて、ご協力いただける方はぜひご連絡下さい。

Tel & Fax (078) 821-5780

朴木 (自宅)

震災で思ったこと

正木 恵子

「私の設計した建物は大丈夫かしら」地震直後、暗がりの中で懐中電灯を探しながら私は、そうつぶやいていました。

私は建築設計の中の、構造計算という分野に携わっています。簡単に言えば、建築家がデザインしようとする建物が、地震や台風に対して安全であるように力学計算をし、設計する仕事です。

幸い、自分の構造設計した建物は被害はありませんでしたが、この時点で私には今回の地震の規模について、まだこの程度の認識でしか無かったのです。その後、次々に明らかになった建築物の被害は皆さんもご存じの通りです。私たちが今まで経験したことのないような被害が沢山報告されています。これらについては、今後各研究機関の手で解明が進み、よりよい構造設計の指針が示されてゆくでしょう。

ただ、それとは別に私にとってショックだったのは、倒壊した住宅の下で多くの尊い命が奪われたという現実です。

私たちは最新の技術に目を奪われ、古いものに対してあまりに関心ではなかったか。古い建築に対して耐震性を高める補強等についてもっと積極的にアピールし、その社会的責任を自覚すべきであったのでは……。

多くの犠牲の上で示された事実は、重く厳しく我々に迫ります。自然の力に対して、常に謙虚でなければならぬと強く思います。

第2回 ユイ・フォーラムに参加して

富本 亨（建築家）

被災判定など建築ボランティアに参加して感じたことに、結果が行政の処理に反映されていないということがあった。緊急時において〇〇ボランティアセンター、〇〇ネットワークなどは効率のよい支援ができたのだろうか？

宝塚市の場合は平常時から社会福祉協議会のボランティア活動センターが力強く機能していたので、比較的うまく被災者への支援ができたとのこと。コミュニティのネットワークが普段から力強く動いているからこそ、緊急時に行政が軸になって対策ができるということ。

民間のネットワークには、各種ボランティア団体や職能団体があり、それらを緊急時にうまく利用できる方法を考えておくことが重要である。民間と行政の中間にプロフェッショナルな緊急対応機関が必要ではないだろうか。必要に応じて、各団体から訓練された人が臨時職員になり、各ネットワークをうまく機能させることができれば良いと思う。行政は彼らの行動に対して人的、財政的など支援を行い、結果に対して責任をもつ必要がある。今回、多くのボランティアグループが生まれたが、支援活動を通じて多くノウハウを得たと思うので一つの機関で情報を集めて研究する必要があるのではないか。

ユイ・フォーラムで若い学生さん達と同じテーブルで話しあう機会があったが、日頃から子ども達とキャンプ活動をしているとのこと、人が好きだという思いが感じ取れた。建築ボランティア活動で得た

ことも、人を愛することがボランティア活動を支える原点だったということである。

震災で見えてきたこと

権野 キヨミ （吹田市）

何だろう？「風化」という言葉がよぎる。6ヶ月経った。サリン、オウム円高．．． 震災は天皇崩御以来の全国国統一報道だった。

私は4月、震災の取材をもとにした語りのチャリティライブをした。必死だった。初めて真実を見たと感じた。しかし、そのその真摯な気持ちは風化したか。違う。むしろメラメラと怒りは増幅さえしている。それはあまりに目まぐるしいこの国のジャーナリズムに向いている。少しは考えさせろ！感じさせろ！少しは真実を知りたいと思え！あなたたちの知りたいのはただ、事実という馬鹿げた垢に塗れた石ころだ。

この国、この国の奥深く眠る爛れた精神が震災後噴き出した。「事実」は事実でしかない。何かを探せ！事実を生んだ事実を。震災の風化は、ジャーナリズムというこの国の「心」の錆のせいだ。政治のせい？ 否、政治は早くから腐っている。しかし性質の悪い事に彼らは自分たちは正義の使者と信じているから情けない。結構な手当で任せている我々こそ良い面の皮だ。三権分立に見合うもっと本物のプロを私たちは雇わなくては。事実だけを追っかける（実はそれも物足りないレベルだが）報道に、これほど愛想尽き、怒るのも、これが唯一我々の武器だからなのだ。信頼したいからだ。

震災後に見えたものは、案外、政治家と報道を野放図に育てて来た私たちの「怠慢」と言えるかもしれない。姿勢を正して、現実に関わる真実を、具体的施策を見いだす必要性を感じる。それから、それから。喉元の熱さ、忘れずに．．．．．

陸田 昭子 （大阪市）

我が家にはお金は勿論、金目のものも無きに等しい。そのうえ借家ときている。だから、もし仮に家が倒壊したとしても実損は多寡がしれている。

しかしこの家で暮らした歳月は紛れもなく私自身のものであり、そこでの人生の哀歓は私の生きてきた証しそのものだ。その家が見るも無残に崩れ落ち、跡形もなく消失している．．．、震災を免れた我が家でテレビにくぎづけになりながら、涙が止まらなかった。

あれから半年、人々は健気に、失ったものの中から立ち上がろうとしている。今、私の目に映っているのは、人間の強かさと韌かさだ。人は希望を失わない限り立ち直ることができる。

被災地の人々が行政に対して対等に向き合おうとしている姿勢を評価したい。なぜなら、行政への期待は住民の生命と財産を守ることにあるのだから、長いものに巻かれていては復興の本義を見失う。

そんな強かさと韌かさからは、防災に加えて生活者重視の優しい都市像が見えてくる。

尼川 洋子 （神戸市・灘区）

人間にとって家（住まい）がどんな役割を持つものか、身に沁みてわかった。生命を護る所、心の拠り所、生活の場、活動の源泉…。安心して住める家がなくては人は生きていけない。

豊かな国と言われていたはずなのに、いったん「家」を失ったらどうなるか。避難所から仮設住宅という公の施策をつぶさに見せてもらって、改めて自分の立っている所の脆弱さに気がついた。ローンを

かかえ古くなる分譲マンションと共に老年に到る私たち団塊世代の老後はどうなる？

スタッフだより

●**中川俱子**より：7月22日、「女性建築技術者の会」に招かれて、神戸の現状等について、東京まで話しに行きました。参加者は20人。

復旧が進んでいない現状、例えば私の住んでいる東灘区本山中町では、木造住宅90%が解体され、空き地には草が伸びている状況、私が事務所として借りていたマンションは12月に解体予定です。夜はまだ暗く、人口は減少し、東灘区だけで約15,000人の人口が減っています。

また、震災は女性問題であること、家事や家族の世話に追われ、仕事を失っていく女性、家も仕事もなくしている人、高齢の女性が多く亡くなっていること、女性の意見が出せる場が少なくなっている状況等について話してきました。参加者からは、東京にいて阪神大震災を忘れていない、東京で今後起こればという恐れを常に持っているという意見、何か手伝えることがあればという申し出もありました。

「ユイ」のネットワークがまた一つ広がりました。「女性建築技術者の会」は建築関係の仕事に携わる女性の集まり。会員数130余名、住宅設計・都市計画・インテリアデザイナー・教師等が参加しています。

お知らせ

●「神戸から」（隔週刊雑誌）の創刊が企画されています

被災者と支援者がつながれる具体的な場づくり／復興をめぐる情報の神戸市民自身のための整理／神戸の復興過程に関心をもつ全国の市民、団体、自治体、すべての関係者のための情報発信／オールタナティブの、ソフトな復興計画のヴィジョン、「希望のカatalog」を提供しつつづけることが発刊目的とのこと。お問い合わせ先：最所（さいしょ）久美子電話（078）302－3918

●ユイ・パーティーのお知らせ

震災からもう半年余りが過ぎました。

暑い日差しの下、神戸の街も私たちも疲れがたまってきた感じがします。元気を出したい、集いたい、そんな気持ちでパーティーを企画しました。「ユイ」の仲間で音楽やおいしい食べ物を一緒に楽しみましょう。

会員の皆様には往復はがきでご案内を差し上げます

日時 8月26日（土）

午後2時から

場所 平生（ひらお）記念館
神戸市東灘区住吉本町2-29-15
電話 (078) 854-1605

会費 4000円

(主催) ウイメンズ・シンクタンク「ユイ」

(c) 1995ウイメンズ・シンクタンク・ユイ (デジタル化：神戸大学附属図書館)